



^ 5
1126
2



門 へ 5
番 1126
夜 2



菊日記

き田

七月十七日

昨日多曇と云ふ風あれて秋のきささ乃お
ととゆへくはくくても花さうさういふふと
よるに漸疾ふゆふひていふくくくくく
まさらむるげわくハ秋をもちま二夜とそ
旅を痛やうくこのね高きおやうく印とら
路ひさしては遠乃人くハ夢をまのめい

中
きつひとていへぬ疾の留ひもてこよみこころ
けりて川のゆくことゆきまれば一て居て病を
けりてゆきゆきとせしむる病の留ひもていへぬ
しりて吾翁の難皮れ結痛よくくまひひ
つゝその時をちぢふて入てぬきまの
あつりわたりぬきゆきとて今かくぬき百里の所
見るて海山のともてよ方とてあはしてむむ
宿世のらきやと語泊たたりひとていへぬ
つゝその時をちぢふて入てぬきまの
あつりわたりぬきゆきとて今かくぬき百里の所
見るて海山のともてよ方とてあはしてむむ
宿世のらきやと語泊たたりひとていへぬ

廿月

きつひとていへぬ疾の留ひもてこよみこころ
けりて川のゆくことゆきまれば一て居て病を
けりてゆきゆきとせしむる病の留ひもていへぬ
しりて吾翁の難皮れ結痛よくくまひひ
つゝその時をちぢふて入てぬきまの
あつりわたりぬきゆきとて今かくぬき百里の所
見るて海山のともてよ方とてあはしてむむ
宿世のらきやと語泊たたりひとていへぬ

能登の老翁とまゐる人よ、あはれとてよらむ
 何十の百とみまゐるそのおのゝいふ事もある
 年れりてまゝしてほろのあはれいふことか
 かるまゝとてつかりて老は師乃あはれとて
 づひいとまゐりて居てゐるよ、いふ風物のもくさ
 らせむとてまゐりて居てゐるよ、いふ風物のもくさ
 その人乃あはれとてまゐるのまゝとてかゝる
 行てゐる人とて居て居るよ、いふと我がまゝい
 なむといふのまゝとて居てゐるよ、いふと我がまゝい
 かるまゝとて居てゐるよ、いふと我がまゝい

廿六日

系真川分ち節

九嬭言書

廿八日

口上

まあはれとてまゐるよ、いふと我がまゝい
 たり居てゐるよ、いふと我がまゝい
 一とて居てゐるよ、いふと我がまゝい
 け地とて居てゐるよ、いふと我がまゝい
 なるまゝとて居てゐるよ、いふと我がまゝい
 といふとて居てゐるよ、いふと我がまゝい

ト強しれど性然く白を紅とて
目も夜中も血こそ下とて
ト

五つをわきまきりしん花のりゆ 雨入也
ね風とちうりて吹くや月のさか 竹船
あつめまやねららひて紅粉共紅 魚子

東若路歌

廿九日

柏崎都府下老也

八月朔日

さ田よりと凡てのわい菊代
携りさうりて病床とこられし
菊の信より探れし家おありしや 東若路

各歌

い菊
とんまりと子抱かしうりやの菊 汝東
嬉しさそとちやあてんせよ菊の心 盤泉
白粉共まきり日やそよの菊 伴丹

菊れきよ力付りりゆりり食里風
菊のきれ白粉やも乃新後松 過角
るれを方と拂ふ若菊のふりこが 貫仙
間明も数谷とちりり菊乃花 陸夜

は菊せとよめてもやれはのほは

るありはちりり記

菊のよすはふとれはそ白ひもろふ 九峰
りすれはもや菊よりり 菊よが菊のほ 鳥四
夜ををて給ふや——菊のむ 仙祐

は菊せとよめてもやれはのほは

るありはちりり記

菊のきれ白粉やも乃新後松 過角

一白風しのちとたよふ花坊は病本とさふ
らひ——は彼を而菊と拂へ我の白葉な
ぬららふもその目さ菊よ愈てははのちら
よら——ちちちちち我の葉もまらりて
る代なるぬくちとたのちのちのちのち
——は——は芭蕉のちのちのちのち

東花坊の病と瘵は吾年乃すくはる
とわらわくへし瘵は吾年の病をさや
るくハ我もそ陰よあまのこころを
きりふれよ中一を

まふ林のま塊もはくまの草乃む
耳谷
子房おふくまぬ草れ白ひうふ
東春
白草乃ひまをひんまの草乃
友雙
草のまや林をまれくまふ人
龜子
草花を興して松ありまをり
里夕
新記の花して草乃ま白ひう形
更せ

山草花らわく母起て蒲團か竹道

五日 泊分花節 松守色

十日 奥津分花節 浦色 雨村書通 外故

山花節の地は病物起つとせいか
看病よあまのこころを
信菰のまふまふとや吹山嵐
支考
支考

十二日

金沢分館移

去廿七日陰相分紙初并止云
 系要川治の五陰帖より去廿七日
 の夜お枝かゝりてその例の書更々
 折角く十七日とて痛疾のよう
 ぶらりて力いりおせりて一紙の茶
 おをせりて教と減りて与今孫快筆
 也陰夜を傳さしりりてなるとも
 去水五平筆書に合てて陰治の

難後系力とえ一石太中書やま
 ろくお掃ゆりてぬ連中へて
 子戸へて少官方とらあ地へて
 陰く保書とく型し陰表と別法
 へ入るとも物文とらりてささ
 へるし昔古と書と戸取らりて

子

二月九日

東巻の巻
几下

をいふおそく柳物成
ト人喜ぶ能く一日とあり
あまのしるふ

秋の白やち雪て思也

朝日暮る候

江とくく

薄き夕子物成せよ秋の月

名くち身

可也よ 鶴孔 ちきん 上物あり 中々 小枝

新女とくくせほひも 柳うね 牧草
よい物をいよの 拾あて 花蔭 従吾
一枚子穂よむく まての 枝を 柳坊

十一月

月見

名月よ花あそ 極の本 陰うか 秋夜

五葉や人よりり ち月れ月
いふあそ ぬいされらるる

とるよ ち月を 月の新 全

名録

名月

名月や家腸平一松の影 陸夜
 名月子誰れとまきし松乃交石人
 名月や凡の使れとえきし 改東
 名月やくもぬ餅と祥の音 祥丹
 うとんけと眩てはこまの月又亦 左明
 小江所遊ひたりてこそ席よ
 おられまじはかくトせと
 芋の子れ膝子かよ月んか貫仙

名月や借をれとは新れ美 過角
 豆の形ふじしあさかたん足亦 政伴
 きよれ月あさり縁かぐし家 望風
 名月の心をほやあつらるる 聖泉

十六日

名月

名月や家らしくの物ねん 尾上
 名月や星さうとん寝かす鳴鳥 俊吉

乃て二つをいひて一つをいひ
まひいひたりしをたつたれ
小畑をいひて二里の旅をいひ
天暮れをいひて一里の旅をいひ

十九日 糸島川をたつ 九時書通

廿一日 陸夜分書通 方毛水一里

廿二日

廿日病床に打たる小畑をいひ
まひいひたりしをたつたれ

峰も来て遊ふ日わやまれを 九時
松法をいひて一里の旅をいひ
本花よりそまひの類のいひ
なけしの種一武士をいひ
糸島小畑をいひて一里の旅をいひ
信じて一里をいひて一里の旅をいひ

廿四日

糸島小畑をいひて一里の旅をいひ

九月二日

病家より人書あり

子抄理ふ秋面白や、西あけり、更也
亭より冬を越えよ、弟をわたりて、支考
け松よ、三日月障つ、枝もかしく竹音
及、夕の風め、向きや、あゝ山、亀子
常流を、所本遺の、若れよ、こぼり、竹音
武士より、交りて、町の、廣くよ、筆

三日

精進

四日

きよしの病は、はの、終りて、ん、え、飯、吾、徒者
ある、男、ふ、整、利、と、と、か、と、そ、と、あ、り、と、ん
さ、れ、の、侍、と、り、と、り、と、り、の、浦、崎、う、あ、そ、め
き、れ、く、や、と、と、と、と、奇、一、曲、乃、後、と、れ、り、よ
る、し、と、り、て、四、比、か、つ、く、と、あ、り、よ、は、り、と、り
き、る、後、よ、い、む、之、れ、唯、か、り、白、紙、今、ん、ら、り、の
わ、却、て、い、れ、ら、り、と、ん、一、南、を、佛、あ、る、言、の

中

一

文とよみあれて南を酒有長看と後道
くくかかごうとつ方の果ももてて
くたむし善化和尙の棺乃中よりわひ
くされよふにゆや遊つるも終終まの
この長あふしきよの我う終いあふ氣はけの
くさるに終る終く見して客の才一うく
そ次は禱有衣のさくひらる客をさり

かり敷るや終りねやろく秋のおお東路
判終あふ

判刀よあふぬの終や拵拵く風し

さるさよえやや強る屋の月 皎若
兼れ兼や板の柱小腕まくり 阿世
まらりく障子開くや兼の風 青柳
朝乃日小晴しうこくやたまこほ 岳亭
兼やよ力からまたりて 志まろ 舟谷

は日判終あのかたよ

まかア〜

まかかれぬ日南小橋く橋の色 石人
かひのそえ同く名をけけりもろ 遇角

陸夜老母とやうくの祝ひとて提筆
とてこれ一よな書と人より又三は
いふらよとて今日刺書とて
く一日外かたの万子とて提筆一括
所取の後まきけよおとていひの
月もかたかていひとて

第一節かきとて移るる所う取 左空

身きぬよ刺書とて秋の風 陸夜
所く終てとら方とては書と書 改東

五日

きつ初立とていひて凡と書とて
かきとていひとていひとて
いひとていひとていひとて
いひとていひとていひとて
かよとて道のりとていひとて
中よかたやいひとていひとて
いひとていひとていひとて
いひとていひとていひとて
いひとていひとていひとて
いひとていひとていひとて

此菌号

賤菜をあるやうに風折のとき人にて
夷洛よそのらんをば折しう今又その
先のなき人としてさうして作るその
括てその根をこすその親をなす
それ子を咲きんやい子小此菌の二と
あえて家上二葉の母のきん
とすうくはくちあき
袴にて穿く菌のよめひの事 不意

下月

岳亭

我とてふてふもとてふ本この秋 岳亭
世いそく小葉 梅の 圃 岳亭
月影も横の貴居を少知く 阿世
二人の縁乃袴とて 風し
々あやや朝日たるう 氷餅 車谷
城下とてふもてふ所 掃除く 几木
ちんほくはくちあき 岳亭
ら凡そくはくちあき 岳亭

草狩

け亭の茶はる皆ね系にしてほは草
 狩の具とそふふも先不耳言江師曰
 をかきし狩しいらら草草よもを
 さしとる人しそのあつはらし
 三師或いはわぢぢのねと或いは白髪
 のおやららふぬられが年あつて
 うまむまきらららめのおうら
 をれおふふらららら親らら我
 おひあつてねーは除は鬼七

このふもちぬれふられて木打の
 藤とてあひらけりてはらら
 のあつて一日のあつてはらら
 と花坊らとあひらけらるはら
 腰を預くまの坊場の着到下
 しそしそしそし

草狩や極小眼鼻令の鹿 木花坊
 草狩ふふ我兄弟の子柄が耳
 草狩やあつてはらら下風し
 きけり利や借はららら 皎雪

草花の瓢おとすゆり平きり 凡木
左のりやる丹精をくけ 阿世
草花やぬけはれは 青柳
草花や 服拵ふとす 夕雨
乃第の利や人の 縁はりる 草花

七日

凡木老人とて 世をよしのよ
ゆりのりやる 縁をくけは 阿世
そのりやる 市中に 隠者といふ 一系
さくすまのりて 病はのりて 阿世

庭をとりて 娘は 口十 花 支考
筆は 花人といふ 月 阿世
阿世の 秋の 花は 阿世
月利の 阿世 阿世
阿世の 阿世 阿世
橋をとりて 縁の 阿世 阿世

八日

区轄

阿世の 阿世 阿世
阿世の 阿世 阿世

九日

勅請文

今日は何の風情とあつた福とけられたのを
もつて徳神 徳佛をて招請して兼て日の
酒古き徳をよ ありつた村にや茶師如來
何をて後徳のはりよ今に比きの時を
定めて抽味等の一盞のよりや一人かへけ
ちつてお細々

親着の由事一々のせれ合盛所原おる
まよひれはよこにふりつて

以て世にふりつてけりあふかくは農家
そのよき夜いふにふりつてあつた
孝行其いふにふりつてあつた
我も境母よ人參とていふ節の徳を
定むる多かしの徳神にけり余の親といふ
れ方をよりつてよき徳の徳を
夷之節大里とていふに中よりあ連る
あつた徳神にけりあつた徳神にけり
かへけりつて大里にけりあつた徳神に
くちあつた徳神

観音

夕雨

観音の御坐所よ別てや兼れは

神農

青柳

百草の湯を長くし兼れを

智婆

阿世

業をやく者はあゝあゝかたの

多智明神

耳谷

兼れぬや非とも終て授子有

夷之印

皎雪

け兼れぬははともや兼れは

大黒殿

奈雙

子孫繁下大黒殿むすの音

布袋和尚

風し

兼れて過能く中く布袋は

韋駄天

早信

兼れて天々分代信々

馬菩薩

早亭

南風しつる強りし上は

道祖神

支考

兼れずぬておろくは

中

三

十日

この日の故者亭の事より記す
夕の竹遊亭乃客ありよる

市中や十日の菊は客をきく人 支考
軒れ葉も拂ひすよ月 竹遊
株もくや隣子むとく工學きて 更也
籠の木もれあそびさひくを 竹童
もかえれい又後世くる梢くと 里夕
船起引く氣とまあよたろ 龜又

題十日菊

この菊を十日工學いと作らるる 更也
言てた十日の株一葉と月 葉子
言つてくくる菊を記して十日の 里夕
言ひてくく擡振の菊乃十日の 半ト
此言とく十日の菊一砂少く白 竹童
故者方より本館出たの
竹といふと人こまればる

物小く菊の事わやそ傳りきり 故者
十日の菊は夕乃とれ 竹遊

けいふはたより花柳あるが文を
このおの病腹よくらうらうらう
角呂正勝を起すあり

けいふ小菊といはぬー我の病 芦文
状巻や花柳も月日菊の正勝

此依向の花柳く
菊は後少くし

張と向うて菊をとりてぬ男が 角呂

此紙面分おもしろく 是れ地味
不致しく下本花柳のさうまを
見るのさうまをくそに作る
しくその向の付しらぬ此は使
あまふいそくく菊をて中一紙
きくまの馬妓を初まてさう地
旨指ちえとくくくくその前
凡してやん菊の事と作すは
もたれさうまをさうまありすし

あま書けいし菊咲むる方そろ 有範

十二月

毛情のいとぬるす中と

斗つ筋くせく

端つらんくぬるもる應やを所 皎舌
 空雲の晴つむらるる乃 月 竹庭
 合屏丹柱のそよあやを舞まきて 又老
 いと川のほれよのりくく 碎 更也
 健張の介いみあせさる 海 一 船 竹童
 あわらうまものそよた名とら 子 龜子

十二月

桂花梅亭

今宵十三夜九月又びとてきめく 風流は
 もくもくしるしは梅は此ありてわけて今宵の月
 まををかまふくまは似たり 梅よみなり 九階
 くるるを眺るよふふひくくすてんを寄し梅は
 東北に彦く山の西南にほくまわら梅の好む
 明もけりあを月い今宵の月あやて洞庭の
 秋もくもくさるるく 小舎れるるれ田子たき
 まんくい梅とすてりる守りるものな

中

ことしはあつしれ竹は市産のふもたつこころ
 と利は新のさひな心をたてあつくさ
 むらむらむら事羽化して登仙の門はく
 きたか月の月をきりては株の名あふんは
 若はけて桂花はさしつアヤと東舞院
 糸とゆいんを存とるのみ

支考

菊の枝はあふんかーくよの月
 かんほらるる居のまをい海山竹を
 懐きしけり枝とさあかゆく
 さあく凡乃喚かりくあやと
 鬼子

振立る在柄の徳杖白くも毛竹葉
 去る花のあふん市巾乃松阿世
 我身してあふんはれハ張をかり
 更也
 八九間ゆけそそま行まふ
 草客
 持細く歌ひくアはれい冬を在舟
 早佳
 竹葉はゆけく又あふれきり
 友雙
 菊若れ田葉とやあふりく
 風乙
 くらあはれいあふん宮のまをよ
 筆大

三冊之内

雁音
八葉
富苗

三冊之内

三冊之内

